



こーひーぶれいく

時空間を超えた旅の楽しさ —東京下町のまち歩き

三村 優美子

Mimura Yumiko

趣味は何かと聞かれたときには、旅行とまち歩きと答えている。約2年間続いたコロナ禍で海外旅行はもとより国内旅行も繁華街での買い物も自粛となり、まちの中から人影が消えるという異常な事態が出現した。旅好きの身にとっては少し寂しい2年間であったが、むしろ新しい旅のスタイルを発見するいい機会になったとも言える。それは、自分の周辺のまちを歩いて楽しむ小さな旅である。このコロナ禍の中で、旅のガイドブック『地球の歩き方—東京』が人気になった。海外旅行のバイブルであったこのシリーズでなぜいま東京なのか？と不思議がられたが、東京は、過去、現代、未来が重なり合い、近代的な巨大都市の顔の下に江戸や明治の面影が色濃く残る稀有なまちである。関東大震災や東京大空襲で失われたものは多いが、それでも何か手がかりさえあれば江戸そして明治東京の面影を探し出すことは可能である。

東京のなかでも私が特に心ひかれるのは下町の散策である。例えば、門前仲町駅から深川不動堂、富岡八幡宮、清澄庭園、芭蕉庵史跡、森下駅までをつなぐ深川散策は、途中、隅田川や小名木川、清州橋の風景等を楽しむことができるお薦めのコースである。特に紅葉のシーズンの清澄庭園は美しい。江戸、明治、大正、昭和と現在が混在し、最近では昔ながらの商店街の中にクラフトショップやこだわりのカフェ等があり、最先端の消費トレンドも楽しめる不思議なまちである。

この深川エリアの楽しみ方の1つに正月の深川七福神巡りがある。東京で最も有名な七福神巡りは谷中七福神巡り（田端から上野不忍池に至る）である。途中に富士山を望む富士見坂、谷中商店街、谷中靈

園、上野公園等があり、変化に富んでいる。それに対して深川七福神巡りは、平坦な道程でまち並みの変化は乏しいが、むしろ地図を片手にした宝探しのような面白さがある。今年の正月、大学院の教え子と深川七福神巡りを行った。東京が珍しく大雪となった日であり、森下駅から出発したときはまだ降り始めであったが、深川神明宮（寿老人）、深川稲荷神社（布袋尊）、龍光院（毘沙門天）、円珠院（大黒天）、心行寺（福祿寿）と進んできた頃から雪は深くなり、冬木弁天堂（弁財天）、そして最後の富岡八幡宮（恵比寿神）には必死の思いでたどり着いたのであった。無事に七福神すべての御朱印をいただいたが、不思議な達成感があり、また来年もやりたいとその魅力にはまってしまった。まさに江戸の庶民の生活の知恵。遊び心にあふれた正月行事である。

深川に心ひかれる理由の1つには、永井荷風の随筆『日和下駄』（1914年）がある。永井荷風は江戸の古絵図を持って見知らぬ裏町や路地を歩くことで、近代化の中で消えゆく江戸の面影を見出そうとしている。それは、名所旧跡が並ぶ京都や奈良のまち歩きとは完全に異質なものである。ビルや普通の住居が並ぶ平凡な風景の中からまちの記憶を蘇らせようとする試みであり、時空間を超えた旅といってよい。そのまちに眠っている小さな物語を発見する旅でもある。永井荷風は、寺、崖、路地、坂等をキーワードとしてまちの記憶をたどっていく。なかでも隅田川、深川小名木川周辺の描写には特別の愛惜の情が感じられる。

永井荷風のような江戸文学や美術への深い造詣はとて望むべくもないが、日和下駄風のまち歩きに魅力を感じる人は増えているように思われる。先述のガイドブックの人気は、単なる名所旧跡巡りでは飽き足りず、自分なりの切り口で時空間を超えた旅を楽しみたいという新たな旅のスタイルが広がっている証拠である。次は、江戸の古絵図を持って歩いてみたい。

（青山学院大学名誉教授）